

中国人高校生の異文化適応過程

—文化的アイデンティティ形成の要因に注目して—

教育創発学コース 趙 衛 国

Cultural Adjustments of Young Chinese Students in a Japanese Public High School:
Factors in the Formation of Cultural Identity

Weiguo ZHAO

This paper examines the effects of interaction with a different cultural environment on personality formation and ego establishment in ten Chinese students, and then draws conclusions concerning the main effects of adjusting to a new cultural identity. An analysis of data from a three-year ethnographic study in K. High School suggests that three key factors influence adjustment: the existence of friends and important others comparisons between Chinese and Japanese schools, and family influences. These three factors are interactive, and influence students' adjustment to a new school and the re-adjustment of their cultural identity.

目 次

- 1 章 問題と目的
- 2 章 研究方法と調査協力者の概要
 - A 研究方法とデータの収集
 - B 調査協力者の概要
- 3 章 事例
 - A アイデンティティ・クライシスを抱く「中国帰国生徒」竜二君
 - B 日本の学校文化を受け入れるまで突っ張る剛君・武君・健君
 - C 自立を目指す雪さん・葵さん・薇さん
 - D 進路をめぐって親と対立する梅さん・玲さん・潔さん
- 4 章 考察：中国人生徒の文化的アイデンティティ形成の要因
 - A 要因①：友人や重要他者の存在
 - B 要因②：日中間の学校文化・教育観の違い
 - C 要因③：家族からの影響
- 5 章 まとめと今後の課題

1 章 問題と目的

本研究の目的は、13～16歳の間に来日し、公立高校への進学を果たした中国人生徒を対象に行った3年間

にわたる参与観察を通して、彼らの日本の学校への適応過程における文化的アイデンティティ形成およびそれに関連する諸要因を明らかにすることである。アイデンティティの形成が重要な課題とされる青年期(Erikson, 1959)¹⁾に異文化間移動を経験することは、二重の意味で自分の存在の基盤を失う危険性を増すこととなる。すなわち、青年は、大人社会と子ども社会の間で、さらには、1つの文化と別の文化の間で、自らの存在の基盤を現実社会の中のどこに見出すのかという、課題の解決を迫られている(小澤, 2001)²⁾のである。

これまでのニューカマー生徒(以下、NC生徒)の学校適応に関する研究の多くは、多様で多層的なエスニック・カルチャーをもつNC生徒が日本の学校文化に適応するなかで、様々な困難に遭遇している点に注目してきた。梶田(1997)³⁾は、日本の学校に入ったNC生徒への教育的対応を「3階建の家」に譬えている。1階は異文化交流・理解で、2階は言語指導、3階は教科指導であり、「この3階建の家を支える土台は何か」という、子どもにどのようなアイデンティティを形成するか、ということである。しっかりとしたアイデンティティで支えられていないと、地上3階の建物は崩壊することになると、アイデンティティ形成の重要性を指摘している。さらに、NC生徒へのアイデンティティの問いは、3階建のそれぞれのフロアの活動から、

直接に発せられ、それらすべての問いは、「何らかの形で外国人児童・生徒の内面にすでにある価値観意識、自我、自尊心に密接に関わってくる。そして時には衝突し、深刻に葛藤に悩むこともあるだろう」と論じている。約言すれば、NC生徒が日本の学校文化に適應する過程において、学校内でのすべての活動や経験が、彼らのアイデンティティ形成の営みに関わってくるのである。

本研究の関心は中国人生徒たちが日本の学校に入り、新しい環境にいる自分をどう受け止め、日本人生徒と教師とどのように関わり、どのような将来像を描き、どう生き方を選択していくかにある。この点で箕浦(1994)⁴⁾の研究は重要である。箕浦(1994)は異文化の中で人格形成をした人の文化的アイデンティティを「自分とは何者であるかについて自分自身が抱いているイメージ・信念・感情・評価などの総体である」セルフ・アイデンティティの一側面として捉え、「特に、個人がその中で生きている社会・文化システムと自分をどのような関係においてとらえるかを示す自己意識」と定義している。このような氏の概念を踏襲して、本研究の文化的アイデンティティを次のように定義する。すなわち、13～16歳の間に来日した中国人生徒たちが、公立高校で学ぶ3年の間に、日本の学校システムと自分をどのような関係においてとらえるかを示す自己意識と定義する。言い換えれば、本研究の協力者である中国人生徒たちは、来日前に中国社会での生活経験により身につけた価値観や行動意識が、来日した後の彼らにとって、発達途上の、中国人としてのアイデンティティであることを絶えず強調している。日本の文化へ移行するなかで、彼らは新しい価値観や行動様式の再学習を要求され、その再学習によって、来日前に身につけた中国的な行動様式や価値観に対して、部分的或いは全体的な否定が彼らの中で起こっていると考えられる。すなわち、彼らの文化的アイデンティティ形成を、このような自己と他者や環境の間のバランスをとるプロセスとして、個人とそれを取り巻く文脈との間の相互調整として定義することができる。

これまでのNC生徒のアイデンティティ形成に関する研究では、主に中国帰国者児童生徒(以下、「中国帰国生徒」)(鈴木, 1988⁵⁾; 周, 1991⁶⁾; 永井, 1998⁷⁾; 大久保, 2000⁸⁾)や日系南米人児童生徒(コガ, 1998⁹⁾; 関口, 2003¹⁰⁾)を対象として、彼らのエスニック・アイデンティティの有様について論じられてきている。両者の共通点は、中国帰国生徒と日系南米人児童生徒を「日本人」と「非日本人」の間という「境界空間」に位置

づけ、「家族の人的資源・資本」にも「言語文化的資源・資本」にも恵まれず、「負のラベル」によってステイグマ化され、社会的に不利な位置に置かれ続けている「マイノリティの子どもたち」(関口, 2003)と捉えている点にある。さらに両者とも、それぞれの歴史的な背景によって、中国社会や南米地域社会で「日本人」というレッテルを貼られ、共同体から排除された部外者として生きざるをえなかった。しかし、日本社会への「越境」行為によって再び、それまでに自分の所属する共同体の中で培われてきた自己の同一性が攪乱され、動揺や亀裂が生じ、危機的な状態に陥ってしまう、いわゆるアイデンティティ・クライシスを抱えていることで両者は共通している。それを乗り越えるため、大久保(2000)は「中国日裔青年」というアイデンティティを提唱している。また、関口(2003)は日系ブラジル人の子どもたちの異文化間経験とその結果としてのアイデンティティの行方を左右するのは、「外見」と「内面化した文化」によって境界付けられた「主流文化との関係性」であり、異文化間に育つ子どもたちが自由にアイデンティティを選ぶ開かれた社会文化システムの構築が必要である、と指摘している。

このほかに、森田(2004)¹¹⁾は公立小学校に在籍する3人の日系ブラジル人児童の異文化適應していく過程を3年生時から6年生時にわたって長期継続的に考察している。その中で森田は児童の「日本の学校適應」と「学習の成功」に影響を及ぼした要因として2点あげている。第一に、学級という社会集団に共同参加しているメンバー同士の相互作用によって形成される自己肯定的な対人関係アイデンティティである。第二に、日本人児童の主流派とは異なるマイノリティたちと、自発的に連帯し助け合ったり、意識的に区別し離れたりすることによって、肯定的な自己確認を模索するマイノリティ内ポリティックスである。また、佐藤(2001)¹²⁾は外国人生徒が日本の学校に適應するなかで現れたさまざまな不適應現象とその要因について分析を行っている。その大きな特徴としては、①文化的アイデンティティや文化的特性を保持することが困難であること、②日本の文化の集団と関係を持つことすらできない子どもが多いことの2点が挙げられている。

以上概観した研究より、NC生徒のアイデンティティ形成には、民族的・歴史的・文化的背景およびそれぞれの学校経験などの要因が影響を及ぼしていることが明らかとなる。しかし、これらの研究では以下の3つの問題点が依然として残されている。第一に、日系人の子どもたちをはじめとするNC生徒が日本の学校に

入り、急速にその数を増やす90年代初頭には、受け入れ態勢さえ整っていなかった。その後、定住化も進み、近年、日本の学校に好適応し、学業達成に成功した生徒の例も少数でありながら、実在し始め、いわゆる生徒分化の現象も生じている。つまり、発達主体としての能動性を持ち、日本文化への積極的な適応意思や順応性を有しているNC生徒が現れている(趙, 2006)¹³⁾。そこからアイデンティティ形成の多様性が生じているのではないかと予想されるが、これまでの研究ではまだ言及されていない。第二に、異文化接触における個人の心理的文化変容を長期的な時間的経過に従って調査する必要があると考えられる。個人が文化背景の違う場所と交流を持った時、個人のアイデンティティにどのような変化・変容が生じるのか、異文化体験の影響に関連している要因の複雑さを考えると、さまざまな制約が働くことは予想される。それを明らかにするのは従来の横断的な調査研究より、同一の協力者を対象にした縦断的研究が必要となる。第三に、森田(2004)の研究は同じブラジル人児童3人の学校適応とアイデンティティ形成を縦断的に考察しているが、小学校段階に来日した児童と中学校以降来日した生徒の間では発達課題が異なる。そのため、森田の知見はそのままあらゆる年代のNC生徒に当てはまるわけではなく、新たに中学校以降来日したNC生徒を対象に考察を行う必要がある。

以上の問題点を踏まえ、本研究では公立K高校の中国人生徒10名(男4名・女6名)の事例を取り上げ、高校に在学していた3年間のそれぞれの学校適応の様態を詳しく描き、彼らの文化的アイデンティティ形成を、①日本の学校文化がいつ頃からどのようにして中国人生徒の中に文化化(enculturation)され、②日本の文化と来日前に身につけた中国の文化の2つの意味体系の狭間に、自らの生きる世界をどう再編成しているのか、③自己の将来設計、具体的に高校卒業後の進路決定について、自己と他者の視点の間の食い違いをどのように交渉し、解決に向けて調整するか、と3つの側面から検討する。

2章 研究方法と調査協力者の概要

A 研究方法とデータの収集

本研究はエスノグラフィーという方法を使用する。「エスノグラフィーとは、フィールドワークの方法を用いた調査研究のことであり、またその成果としてまとめられる文章・テキストのことであり」(志水,

1998)¹⁴⁾。エスノグラフィーを渋谷(2001)¹⁵⁾はアイデンティティ研究に用いている。渋谷(2001)によれば、これまで「帰国子女」のアイデンティティ形成に関する研究では、主にインタビューまたはアンケート調査が用いられているが、それらの方法によって収集されたデータは「研究者の問いに対する対象者の対応」であり、「アイデンティティの複層性や流動性は捉えにくいだけでなく、研究者が『帰国子女』のアイデンティティの語り方を規定し、そこに一定の枠をはめてしまうことになる」という限界があった」としている。エスノグラフィーの有効性は従来の研究法で明確にされなかった帰国子女教育の理念の実践のされ方や、「帰国生」の日常体験や主観に接近したことにあると氏は指摘している。

日本人「帰国子女」の研究と同じように、NC生徒のアイデンティティ形成に関するこれまでの研究でも質問紙調査や面接調査が一般的に使われている。例えば、広田・藤原(1994)¹⁶⁾は、質問紙調査を通して、NC生徒のアイデンティティ形成に影響をもたらす要因として、「家庭環境」「納得の程度と新しい状況の定義づけ」「目標の設定」「教育制度と学校及び教員の教育文化」「児童生徒の適応的性格」「彼らのアイデンティティを承認するネットワーク・社会的関係の存在」「学校を取り巻く地域の歴史的に培われてきた違和と親和の性格」と7点を挙げている。これらはNC生徒のアイデンティティ形成の要因に対して示唆的である。しかし、NC生徒たちの日本の社会・学校への異文化適応過程において、個人と環境・他者との相互作用が実際にどのように彼らの人格形成や自我の確立に影響を及ぼしているのか、そこで上記の7つの要因がどのように関連しているのかは、詳細に言及されていない。それを明らかにするためには、面接調査や質問紙調査のほかに、NC生徒の学校日常生活全般を観察し、彼らの日常体験や主観に接近することが必要であると考えられる。Hammersley and Atkinson(1983)¹⁷⁾は、「エスノグラファーは長期にわたって公然或いはひそかに人々の日常生活に関与する。その中でエスノグラファーは起ることを見、言われることを聴き、問いを発する。事実上、自分に興味のある問題を明らかにするためには、手に入れるデータはどんなものでも集める」と指摘している。筆者はこのような姿勢のもとにデータ収集を行った。

協力者たちが在学していたX年4月からX+3年3月までの3年間、筆者は非常勤講師としてK高校に勤めていた。週に2、3日間通い、取り出し指導による『日本語』『地理』『世界史』の授業を他の教員を共同で

担当する傍ら、筆者は当該高校に在学する中国人生徒に関するすべての仕事に携わっていた。具体的には、学期ごとの保護者面談の通訳や、学級便りの中国語訳の作成、生活指導を受けた生徒が自宅謹慎時、通訳として生活指導担当者と一緒に家庭訪問をするなどである。そのほかに、生徒の家族に事故や病気で入院した時、主治医とのやりとりにあたっての通訳、また保護者から中国にいる親戚を呼び寄せる時や帰化手続きを申請するにあたって、入国管理局に提出する書類の日本語訳を頼まれたこともしばしばあった。

このような密接な関係性のもと、生徒や保護者、教職員との間にラポールが構築できたため、膨大なデータを入手することができた。その中から本稿で具体的に使われたデータは以下の3点である。①フィールドノート。この中には、K高校での諸活動の記述、聞き取り(主に筆者が学校日常会話の流れから情報を得るための非構造化インタビュー)の記録、インフォーマント同士の会話の記録などが含まれる。②半構造化インタビュー記録。フィールド・ノートや収集した文書資料を読み返すうちに気づいた問題をまとめ、事前に質問項目を設定して、2～3週ごとに特定の教師や生徒、保護者にインタビューしたものである。③生徒が書いた作文。なお、データ収集、生徒作文の引用および

本稿の公表にあたって、関係者全員から同意を得ている。

B 調査協力者の概要

K高校は首都圏の臨海工業地域に立地し、1980年に全日制課程・普通科(男女共学)の高校として設立された。生活指導が難しく、また学力が低い、いわゆる教育困難校である。NC生徒が多数在学し、X+1年9月1日の時点で、計11カ国76人のNC生徒が在学し、全校生徒の20%を上回る割合である。そのうち、ブラジル出身者は30人で一番多い。次いで中国出身者は24人、残りの22人は各々異なる9カ国の出身者となっている。つまり、K高校はA県の東部・北部にある学区の諸中学校から学力の低い生徒や何らかの問題を抱えている生徒が集まる場所となり、外国籍を含む多様な生徒を抱え込み、居場所を与える地域の受け皿として機能している、と位置づけられる。

本研究の調査協力者10名(男子4名、女子6名)のプロフィールを、表(名前や出身地はすべて仮名)にまとめた。女子6人は、男子生徒のように両極端に分化することもなく、全員「協調性がある」外国人生徒として教員から評価されている。その根拠としては、新入生キャンプや農園体験、毎年文化祭など学校の全般行

表 調査協力者のプロフィール

グループ	事例	性別	出身地	来日時年齢 (来日経緯)	日本の中学校に 編入された学年	家族構成	高卒後の進路
①	竜二	男	A省	15歳8ヶ月 (親に同伴)	中学2年3学期	両親 兄・竜二	公立大学
②	剛	男	B市	15歳10ヶ月 (呼び寄せ)	中国で中学を卒業、 現地入試で高校入学	母・義父(日本人) 剛	4年制私立大学
	武	男	B市	14歳10ヶ月 (呼び寄せ)	中学2年2学期	両親 武・弟	アルバイト
③	健	男	C省	15歳1ヶ月 (呼び寄せ)	中学3年1学期	両親 健	アルバイト
	雪	女	D省	13歳6ヶ月 (呼び寄せ)	中学1年3学期	母・義父(日本人) 雪	アルバイト
	葵	女	E省	15歳8ヶ月 (呼び寄せ)	中学3年1学期	母・義父(日本人) 葵・弟	アルバイト
④	薇	女	E省	15歳11ヶ月 (呼び寄せ)	中国で中学を卒業。 編入試験で高校入学	母・義父(日本人) 薇・妹	アルバイト
	梅	女	C省	14歳7ヶ月 (呼び寄せ)	中学2年3学期	両親 梅・妹・弟	アルバイト
	玲	女	C省	14歳2ヶ月 (呼び寄せ)	中学3年1学期	両親 玲・弟	4年制私立大学
	潔	女	C省	14歳3ヶ月 (呼び寄せ)	中学2年3学期	両親 姉・潔・弟	ビジネス実務専門学校

事に6人とも積極的に参加しており、喫煙や飲酒、暴力事件なども一度も起こしたことがないことなどが挙げられる。しかし、日本の学校文化に順応し、「協調性がある」6人は進路をめぐって悩んでいた。次に高校3年間自然に分けて行動していた4つのグループについて、フィールドノーツを基に、事例の記述と分析を行う。①「中国帰国生徒」竜二君、②剛君・武君・健君、③同じく日本人と再婚した母親をもつ雪さん・葵さん・薇さん、④同じ中国C省出身の梅さん・玲さん・潔さん。なお、括弧の中に書いたものが事例の理解のために付けたものである。

3章 事例

A アイデンティティ・クライシスを抱く「中国帰国生徒」竜二君

①名前の変更によって悩みが生じた。

竜二君は、中国帰国者である母方の祖母を持ち、中学2年3学期に日本に来た。中学3年進路についての三者面談時に、教員から「これからずっと日本で生活するならば、お婆ちゃん(日本の)苗字を使ったほうがいいよ」と勧められて、もともとの「張藍樹」という名前から「田中竜二」に変更したそうである。K高校に入り、すぐR教員から中国の名前を堂々と胸を張って使いなさいと励まされた。「2人の先生とも日本人なのに、反応が違って、困った」と、入学した後、名前の使用について悩みが生じたという。そして、5月の新入生親交キャンプの時、剛君、武君、健君から「なんで日本名にしたの」と聞かれ、お婆ちゃんは残留婦人だからと答えたが、「別にわざわざ母方のお婆さんの苗字に変わる必要がないのではないかと指摘された。答えに窮した竜二君はその後剛君3人との間にはあまり良い関係が築けずにいた。

②教員から高い評価を受けた。

1学期が終わろうとする時に、日系パラグアイ人黒川君と仲良くなり、途中からサッカー部に参加、1年後の2年1学期にバイトのためにサッカー部をやめた。しかし、教員たちは竜二君のことを「積極的に他の国からの生徒と交流を図り、日本の学校文化に馴染もうと努力する生徒だ」と認識し、中国人生徒としか話をしない剛君3人と一線を引いて、高く評価した。だが、中国人男子生徒からはあまり話しかけられることがなかった。また雪さんたち中国人女子生徒との間も多くの交流がなく、中国人生徒から孤立している。

③「2つの名前も好きです。」

竜二君は来日後ずっと地域の学習支援ボランティアが主催した日本語教室に通っている。その1人の講師Y(定年した元中学校『国語』教師)と仲良くなり、日本語の勉強や数学、英語など教科学習の支援を受けていた。それだけではなく、講師Yは学校でのことや名前にまつわる悩みなど相談できる相手になっている。2年2学期『世界史』で移民についての授業を受けた後、「私のルーツ：名前の由来」という課題が出された。竜二君は次のように書いた(そのままの引用)。

「僕は2つの名前を持っています。一つは張藍樹で、一つは田中竜二です。中国にいた時、お婆ちゃんは日本人残留婦人ということで、クラスメートからいじめられたことがなかったが、よく珍しげに『ねえ、藍樹、お婆ちゃんに日本語を教わらなかった?ちょっと日本語をしゃべって聞かせてよ』と聞かれていた。皆は悪意がないのをよく知っているが、やはり心の中でとても嫌だった。何でクラスの子と違って僕だけはお婆ちゃんが日本人なのだろう。日本に来て、中学校の先生に『ずっと日本で生活するならば、お婆ちゃんの苗字にしたほうがいいよ』と勧められて、内心から日本人になりたいと思い、田中竜二に変えた。しかし、高校に入って、すぐ周りの先生や友たちから『中国の名前で堂々としなさい』とか『母方のお婆ちゃんの苗字にわざわざ変える必要がない』とか言われて、この2年間ずっと悩んでいました。名前はなんだってどうでもいいと思いました。でも、両親や、日本語を教えてくれるY先生ともよく話をし、名前に親の愛情や思いがたくさん詰まっていることを教えてもらった。張藍樹という名前は字も読めない父方の祖父が付けてくれたのです。祖父は一週間考え込んで、『この子は青い空の下に育つ大樹のように立派な人になってくれ』と言い、この名前を付けてくれたそうです。そして、田中竜二という名前は父が付けてくれたのです。中国では『中国人が竜の伝人＝後裔だ』との言い伝えがあって、たとえ日本国籍に帰化しても、あなたの心は中国人のままにいなさいと言ってくれました。名前はどうでもいいものではなく、その人の家族の物語が分かる大事なルーツです。移民の勉強を通して、やはり僕は中国にいた時のクラスメートと違い、今この教室にいる剛くんたちと違うところが受け入れることができました。今まで名前のことで嫌な思いをしたが、今僕は2つの名前も好きです。これから学校でどの名前で僕を呼んでも大歓迎です。」

④中国の名前を選んで、大学に入った。

その後、3年生進路三者面談の時、母は「母(竜二の祖母)が大変苦労してきた。親孝行として母が元気な

うちに、日本にいてあげて、亡くなったら、中国に帰るつもりだ。私は日本語も話せないし、ここにも友だちがいない。息子がどの国でも通用できる技術を身につけてほしいから、大学に行かせたい」と担任に話した。竜二君は部活に1年ほど通い、3年の間欠席した日数は2日間だけで、遅刻は1回もなかった。その上各教科成績がトップクラスで、付けられた成績概評がA段階だった。結果、中国帰国者枠が設けられている公立大学に推薦入試で受かった。出願書類は田中竜二ではなく、張藍樹という名前であった。「僕は張藍樹という名前に戻ったのではなく、二つの名前から張藍樹を選んだ。お婆さんがいなければ、僕もいないし、また日本に来られたのも大学に受かったのもお婆ちゃんのお陰です。しかし、それですとお婆ちゃんの苗字で生きていく正当性がない。僕の存在こそがお婆ちゃんの苦勞した歴史の証です。これからは自分の力で頑張っていきたい。だから張藍樹という名前を選んだ」と話した。

竜二君の事例から分かるように、彼は来日前に、中国の同級生に「日本語をしゃべってみて」と要求され、心の中で違和感を覚えた。来日後中学の教員に「お婆ちゃんの苗字にしたほうがいい」と勧められた時、「内心から日本人になりたい」と思っていた彼は抵抗なく「田中竜二」に変更した。しかし、K高校に入り、新しい他者(剛君たちとR先生)と出会い、新しい環境(日本人らしくない苗字が堂々と使われているK高校)の中で、田中竜二という自己と「田中竜二に変更しなくてもいい」と思う他者の視点の間に葛藤が生じ、彼はアイデンティティ・クライシスに陥っている。中国人生徒から孤立したが、日系人生徒黒川君と仲良くなり、サッカー部への参加によって、日本人生徒との交流もでき、新しい自己意識を獲得するようになった。また、学外で学習支援も悩み相談もしてくれたY先生の存在も大きいと考えられる。さらに、学校で移民に関する学習によって、「田中竜二」と「張藍樹」の統合ができたと言える。

B 日本の学校文化を受け入れるまで突っ張る剛君・武君・健君

① 1年1学期に「飲酒作文」で南米系生徒との仲が悪くなった。

剛君は中国で中学校を卒業した後、3ヶ月ほど中国の高校で勉強していた。日本人と再婚した母の呼び寄

せで来日し、X年2月に選抜試験(外国人特例枠)を受けて、「現地入学」でK高校に進学した。『日本語』がほとんどできていなかったが、『英語』や『数学』ではほぼ満点を取ったことで、入学する前から教員から期待されていた。しかし、日本の学校は初めて経験することが多く、遅刻して上靴に履き替えることを忘れ、土足で教室に入ったり、『体育』の時体操服に着替えなければならぬのに、体操服を家に忘れていたりすることが何回もあった。先に来日した武君と健君にいろいろと教えてもらっているうちに、彼らと仲良くなっていくが、3人一緒に遅刻や早退をして、入学早々指導されることとなった。5月上旬の新生キャンプの後、『日本語』取り出し授業で感想文を課題として出されて、日本語があまり上手ではない剛君は次のように書いて、皆の前で発表した。

「キャンプはとてつまらなかった。疲れた。終わってほっとした。次の日は僕の誕生日でした。武君と健君と一緒にビールを飲んで、楽しかった。」

読み終わった瞬間、南米系の生徒から「謹慎だ。ビールを飲んだぞ!」と叫ばれたが、剛君は最初何の騒ぎか理解できなかった。授業後にたちまち「中国人生徒がビールを飲んだ」と他の教員の耳に入り、剛君3人は生活指導担当から事情聴取を受け、結局3日間の謹慎処分となった。剛君は「中国では誕生日の時お酒を飲むんだよ」と反論し、「中国では未成年者は誕生日の時お酒を飲んでもいいかも知れないが、日本では20歳、成人になる前にお酒もタバコもだめだよと法律で定められている」と教えられたが、「僕は中国人だ。そんな法律は知らない」と、反省の色を見せなかった。逆に「南米の子が騒いだから、僕たちが謹慎になった」と思い込み、南米系生徒との仲が悪くなった。その後、剛君3人は相変わらず校則もよく破り、指導に時々逆らったり、口答えをしたり、「自己主張の強い」男子3人組と呼ばれるようになった。

② 2年生に社会体験先の農園で日本人生徒と喧嘩した。

2年生1学期に社会体験の行事で農園に行った時、剛君3人と日本人生徒3人が1つの班で活動することになった。作業中、同じ班の日本人生徒から「ね、中国人、仕事を分担してやろうか」と提言され、剛君は「中国人の言い方をやめてくれない?ちゃんと名前があるよ」と言い返した。日本人生徒から「何?お前は中国人じゃないの?中国人の癖に、中国人と呼ばれるのが何で嫌なの?」とからかわれ、「中国人だけど、ちゃんと名前と呼んでほしい」と剛君たちは譲らなかった。激しい言い合いの結果、お互いに手を出してしまった。暴力事件として双方とも謹慎を受ける結果となったが、

名前ではなく、中国人で呼ばれたから嫌で、手を出してしまったことを、事情聴取をする教員に訴えた。しかし、手を先に出してしまった剛君たちが悪いからと、日本人生徒は剛君の訴えを認めなかった。外国人生徒が多数在籍するK高校ではこのような出来事が看過できないと思った生活指導担当はさらに、喧嘩の状況を調査した。しかし、農園にいた時の隣の班の日本人生徒は剛君たちのために証言をしてくれなかった。双方の主張がこう着状態になって、南米の1人の女子生徒から「確かに、中国人って呼んでいたのが聞こえたよ」と証言し、その後匿名で日本人生徒からも証明してくれた。謹慎は免れなかったが、剛君たちの言い分が教員に伝わり、不満が多少和らいだようである。それがきっかけになり、剛君たちは積極的に南米の生徒との関係を修復しようと乗り出した。

③一時帰国した中国の旅先での出来事。

これは剛君3人から聞いた話である。3年生の夏休みに、剛君3人がバイトで貯めたお金で一時帰国し、一緒に中国での旅行をしたという。ある日S市に着いて、旅の疲れで顔と服装が汚れたまま、3人がレストランに入った。そのとたん、ウェーターが「怪しい外人=よそ者がいるから、各自で貴重品を保管し、置き引きされないように気をつけてください」と店内のお客さんにS市の方言で注意した。3人ともS市の方言が聞き取れないが、店内客の警戒する目つきや鞆を大事に仕舞う仕草からウェーターの話の内容が推測できたという。その出来事が3人に大変な衝撃を与えたようで、「差別はどこでもある。日本に長くいると、中国の事を何もかも美化している」と健くんが話した。その時までに進路について何も考えていなかった3人は突然大学に行きたいと言い出した。「もうすぐ高校を卒業するが、僕は日本についてまだ何も知らない。これからいっぱい勉強して、差別のことや、本当の日本、本当の日本人のことなどを考えてみたい」と、剛君は3人を代表して理由を説明した。

④後悔の気持ちがいっぱいだ。

こうして、3年生の9月から剛君3人は大学受験勉強を始めた。遅刻や早退などがなくなり、3人そろって図書室で勉強する姿が多くなった。その時までに謹慎の都度学校に呼ばれた親たちも喜んで、進路について三者面談時に来校した際に、涙を流した。教員からも支援を受け、竜二君からも勉強の手伝いもしてもらった。しかし、やはり欠けたところが多く、武君と健君は時々弱音を吐くようになった。「もっと早くから真面目に勉強してきたら良かったのに」と後悔していた。剛君は「中国では、教科成績がすべてだった。成績が

よければ、教員から高く評価されるから、中学校の時はしっかり勉強していたよ」と話した。武君と健君は1校しか応募しなかったが、剛君は3校に出願を出した。武君と健君は2月に受験に失敗してしまったが、剛君はX+3年3月に高校卒業式が終わって2週間後に、やっと3校目の大学に受かった。

高校に入学した時点で、剛君は来日してわずか3ヶ月、武君は1年3ヶ月、健君は10ヶ月であり、いずれも滞り期間が短い。中国で中学校を卒業して、現地入試を受けてK高校に入った剛君に比べて、武君と健君は日本の中学校生活を体験してきた。そのため、上靴と土足の区別、『体育』の時に体操服に着替えることなど、日本の学校生活習慣を心得ているように見えた。が、それはあくまでも表面的な適応に過ぎない。「飲酒作文」や「社会体験先での喧嘩」の事例から剛君3人が日本の高校でさまざまな困難や挫折に遭いながら奮闘している様子が読み取れる。さらに、南米系生徒や日本人生徒とのいざこざが、3人の日本の学校への主体的な参入や、日本文化に対する積極的な吸収を妨げている。しかし、旅先での不愉快な出来事に遭遇して、よそ者に対する警戒心を抱く現象がどこでも生じうることを学んだ。高校で2年6ヶ月を過ごしてきたが、「日本にいる自分たちが中国の事を何もかも美化」した結果、「日本についてまだ何も知らない」自分になったことに気付いたのである。そして、その時までには反発・抵抗的となった学校が、日本の文化を知るために利用できる資源へと変わっている。

C 自立を目指す雪さん・葵さん・薇さん

雪さん・葵さんと薇さんはいずれも中国の都市部の出身で、母親たちは40代に入ったばかりだが、再婚した日本人の男性はともに50代後半以上である。しかも、葵さんと薇さんの場合は、自分と17、8歳も離れる弟と妹が生まれた。母親たちのこのような生き方考え方に疑問や反発を抱き、心の中で抵抗しているが、口でははっきりと言っていない。その表れとして、3者面談や文化祭の時に、一度も母親を学校に来させたことがない。3年1学期、大事な進路三者面談の前に、私(筆者)は電話で母親たちに「お母さんのご都合に合わせて、面談をやっているから、是非いらっしやい」と頼んだ。それに対して葵さんの母は、「本当は行きたいけど、葵に41歳の母親に7ヶ月の赤ちゃんを抱いて、学校に来られたら恥ずかしい。学校はちゃんとやって

いるから、心配しなくてもいいと言われた」と話した。私は細心の注意を払いながら、葵さんに40代に産んだことが別に珍しい事ではないよ、どうしてお母さんに来てもらいたくないか、と聞いた。葵さんは「母が来たって、大学に行かせてもらえるわけにはいかない。60歳近い義父は母と弟のために、土木工事の仕事をやって、全く他人の私を養って、もう精一杯なようだ。心から感謝している。高校を卒業して大学や専門学校に行きたいが、こんな状況で打ち明けられない」と説明した。私はさらに「バイトをしながら大学に通っている人がいっぱいいる。留学生はみんなそうだよ」と話すと、葵さんは「留学生は勉強のために来ているから、私と違う。(中国にいる)父が再婚して、子どもが生まれたから、(一人っ子政策で)私を引き取ることができない。だから、母と生活したいから日本に来た。留学のためではない。私はとりあえず無事に高校を卒業できるように、そして、たくさんバイトをしてお金を貯めて、自分の力で生活する。その時また何かを習う。習わないかもしれないが、とにかく自立できるようにしたい。雪さんも薇さんも同じだ。雪さんと薇さんがいなければ私はここまでできないと思う。母は母の幸せがあるから。これ以上迷惑をかけたくない」と答えた。

葵さんの話から、父と離婚して、年が離れた日本人と再婚した母の生き方に疑問を抱き、それについて考えて、悩んで、母親の苦悩を考慮していることが読み取れる。同じ境遇にいる雪さん・薇さんがいて、3人で共通している悩みを語り合うが、自分の母親と情緒的交流を持とうとしない。自分と異なる価値観あるいは生き方を持つ母親を理解しているが、母親と対等で独立した関係を築こうと自立を目指している。

D 進路をめぐる親と対立する梅さん・玲さん・潔さん

梅さん・玲さんと潔さんは同じ中国C省の出身で、それぞれ親の呼び寄せで来日した。編入された中学校も同じで、K高校では3人はよくC省の方言で楽しく話している。毎回の3者面談にそれぞれの親が必ず出席し、その場で3人とも「高校を卒業したら、大学に行きたい」と言い続けてきた。それに対して、親たちは「大学はそんなに簡単に入れないよ。先生の言うことをしっかり聞いて、一生懸命に頑張りなさい」と答える。教員側は親の言動から「高校卒業後、梅さん3人の進学したいことを親から同意を得ている」との印

象を受けた。3年生1学期のテストが終わり、その時までの欠席日数や学習態度、教科成績を総合する成績概評は3人ともB段階と評定され、短期大学や県外私立大学の推薦を受けられることになった。しかし、予想もしない展開があった。それぞれの親たちは「女の子は高校を卒業するだけで十分だ。大学を出ても、確実に職につけるわけがないから。大事なお金が水になる」と娘たちの進学に反対したのである。玲さんと潔さんは断食や、家出をするなど極端な手段で親と激しくやり取りをした。その結果、彼女たちの親は大学・専門学校の入学金は出すが、その外の授業料と生活費等は親から一円も出さないこと、すべて自分でアルバイトをして賄うことを条件に、進学を許した。一方、幼稚園の先生になりたい梅さんは、「保母は子どものおしめを変えたり、ミルクを与えたりして、将来性も発展性もない仕事だ」と父親から短期大学保育科への進学を許してもらえなかった。母親に懇願したが、母親は父親と全く同じ考えで、「幼稚園の先生なんかとんでもない。保母は勉強しなくてたつてなれる。お金を出して勉強するなら、潔さんのように簿記とかの専門学校のほうがいい。2,3年経ったら、お父さんは今の料理店から独立し、自分の店を開くつもり。その時、店の会計をやってほしい」と逆に頼まれた。両親との対立が続く中、推薦応募の出願期限が切れて、結局梅さんは進学をあきらめることにした。

進学をめぐる玲さんたち3人と親との間に葛藤が生じたのは、移民世代による意識の違いがあると考えられる。日本で長期滞在となっている親たちは実質的に「移民一世」にあたると言える。彼ら自身は日本社会の一員としての安定した位置がまだ勝ち取れていない状況で、そのため、「お店を開く」資本の蓄積に励んでいる。また、梅さんの両親は保育園や幼稚園の先生に対して偏った見方を持ち、自分の価値観を一方的に娘に押し付けている。梅さんはそれに疑問を抱き反発したが、根本的に親の考えを覆すことができなく、短大への進学を諦めた。

4章 考察：中国人生徒の文化的アイデンティティ形成の要因

以上、4つの大きなグループに分けて、事例の記述と分析を行った。ここでは、彼らの文化的アイデンティティ形成に影響を及ぼす要因に焦点を当て、考察を行う。

A 要因①：友人や重要他者の存在

青年期の友人関係が青年の発達に強い影響を与えている。発達心理学では、青年期を「青年前期(思春期)・中期・後期(成人への移行期)を含む生物学的、社会文化的成長の一時期」¹⁸⁾ととらえ、青年期の友人関係の発達の意義について、松井(1990)¹⁹⁾は、友人が青年の心理的な安定をもたらす、社会的スキルを学習する場を提供し、生き方のモデルになると指摘している。さらに本稿の調査協力者は、異文化異言語環境への移動によって心の不安や悩みが生じ、そのため、悩みや考えを語り合う同世代の友人が必要になると考えられる。竜二君は学校で日本人らしい名前の使用によって、他の9名の同じ中国出身の生徒から孤立したが、日系人生徒黒川君の友人ができたことで、他の文化と自分の関係を相対的にとらえるようになった。一方、日本の学校文化へ反発する剛君3人は、南米系生徒や日本人生徒との緊張した人間関係の中で、固い絆を築き、異文化接触に伴い、生じた不安が和らげることができ、それが彼らに心理的な安定をもたらしたのである。そして、雪さんと同じ境遇に置かれている葵さん・薇さんは、母親たちの生き方考え方に疑問を抱きながら、母親との情緒的な交流を避け、再構成された家庭が母親にとって幸せな存在となればよいと思い、自立を目指している。3人はお互いに自己を開示し、語り合うことによって、積極的に理解し合おうとしている。また、梅さんたち3人は進学したいとの共同目標を持ち、3年の間真面目に勉強し、お互いに刺激しあって、高校生活を過ごしてきた。このように日本の学校文化への適応過程において、10名とも友人や重要他者の存在によって、自己の視点に気付き、さらに他者の視点を内在化しながら、自己と他者の間の差異を調整している。

B 要因②：日中間の学校文化・教育観の違い

剛君の「中国では、教科成績がすべてだ。成績がよければ、先生から高く評価される」との語りから分かるように、中国の一部の学校では成績至上主義で、学業的、認知的発達を学校の最優先課題としている。学校の役割が極端に教科教育に偏って、生徒と教師の関係は学業成績という単一の評価軸で決定される傾向がある。それに対して、日本の教師は子どもの指導や授業に際して、単なる知性を伸ばすだけではなく、「全人」を育成することに重点を置いており、子どもの基本的生活習慣の育成に関わる領域にまで学校が関与する(Tsuneyoshi, 2001²⁰⁾)。つまり、全人教育を担う日

本の学校の生徒と教師の関係は、学業成績と同時に、行動評価という独立した軸が存在しており、教科指導のほかに生活指導や部活指導なども重要な役割を果たしている。剛君たちはこのような日本の学校文化を理解しておらず、内在化することもできなかった。3人は閉鎖的な人間関係を形成し、自分たちと日本の学校システムに対抗する関係においてとらえる自己意識を形成していた。しかし、旅先での不意の出来事で「日本のことをまだ何も知らない」自分に気付き、大学受験勉強を始め、自ら生きる世界を再編成しようとしている。

C 要因③：家族からの影響

先に来日した親の呼び寄せで日本に来た中国人生徒たちは親の移民行為(日本人との再婚を含める)に対して疑問や反発を抱くが、自分の滞日期間が長くなるに連れて、徐々にそれを理解しようと変わっている。しかし、進路決定になると、親子の関係に変化が見られる。竜二君の母親は、日本に滞在するのが歴史的な要因で長年苦勞してきた(竜二君の)祖母への親孝行で、将来中国に帰る予定だと、息子に明確に日本滞在の動機を語っている。それによって、竜二君は将来の人生設計を具体化している。一方、梅さんの両親は、3年間ずっと進学したいといい続けてきた娘に対して、進学させる意思があるとも取れる言動を見せた一方、自分の価値観と違う「幼稚園の先生になる」と宣言する娘に、「女の子だから高卒だけで十分」と阻止した。鏞・山下(1999)²¹⁾は青年期を「親の庇護や価値観を基にして生活していたこれまでの精神生活から脱皮して、自分独自の世界観にもとづいて生活する準備をする」時期だと指摘している。空想・実験期である青年期中期に当たる高校生にとって、大学や専門学校に進学し、そこにおいて自らの進路を決定する仕方は、その後の職業選択に結びつき、自己形成における重要な意味を持っている。進路決定に当たって、青年たちは家族から大きく影響を受けていることが明確となっている。親の考え方、価値観、子どもへの干渉の仕方が、青年に迷いや混乱をもたらす場合もあれば、青年に心の安定感や高い自尊感情を培う働きがあることも明らかになった。

5章 まとめと今後の課題

これまで、本稿においては10名の中国人生徒の事例を通して、彼らの学校適応過程における文化的アイデ

ンティティ形成とそれに関連する要因を3つの側面、すなわち、①友人や重要他者の存在である、②日中間の学校文化・教育観の違いである、③家族からの影響から検討してきた。この3つの要因が孤立しているのではなく、相互に作用して、中国人生徒の文化的アイデンティティ形成に影響を及ぼしていることが明らかとなった。しかし、本研究の知見から言えば、学校適応は異文化適応の一時通過点にしか過ぎず、高校を卒業した後、日本社会や新しい教育環境である大学・専門学校への適応が続き、新しい文脈での「暗黙のルール」への学習も要求されるであろう。新しい他者と出会うこと、或いは自他関係を中心とする社会的文脈の変化の中でこれからは青年たちの位置づけは変容していくのであり、青年たちの文化的アイデンティティは生涯を通じて変容する過程ととらえるべきである。

最後に、今後の課題について二つ言及しておきたい。一つ目は、高校で学ぶ3年の間において、悩み、特に進路決定をめぐって親子関係に葛藤が生じた事例が、今後どのようにその苦しみを乗り越え、自信を回復するかについて、さらに追跡して調査する必要がある。二つ目に、本研究で見出された中国人生徒の文化的アイデンティティ形成の要因を、すべてのNC生徒の自己意識に影響を与えるものとして性急に一般化することはできない、という点である。本研究のフィールドとなっているK高校ではNC生徒が全校生徒の20%以上を占めており、教科指導や部活指導より生活指導が生徒と教師の関係を大きく規定している。NC生徒が少数しか在籍していない学校において、NC生徒の文化的アイデンティティ形成に影響を与える要因が異なってくることが予想される。今後は異なる学校のNC生徒の学校適応の実態を調べる必要があると考えられる。

(指導教官 秋田喜代美教授)

注

- 1) E. H. Erikson, 1959 Identity and the Life Cycle 小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房
- 2) 小澤理恵2001 異文化間移動に伴うアイデンティティの形成 東京学芸大学海外子女教育センター 異文化との共生をめざす教育 pp.203-219
- 3) 梶田正巳・松本一子・加賀澤泰明編著 1997 外国人児童・生徒と共に学ぶ学校づくり ナカニシヤ出版 p.15
- 4) 箕浦康子1994 異文化で育つ子どもたちの文化的アイデンティティ 教育学研究 第61巻 第3号 pp.9-17
- 5) 鈴木智之 1988 中国帰国者の「子どもたち」：異文化環境への

- 適応と自己の模索のなかで 解放社会学研究 2 pp.108-125
- 6) 周飛帆 1991 中国帰国生徒の異文化適応に関する一考察 筑波大学 教育学研究集録 15 pp.69-77
- 7) 永井智香子 1998 中国帰国者の帰属意識に関する研究 グローバル時代における学校カリキュラムの再編に向けてのデータベース開発 研究代表者 浅沼茂 pp.255-266
- 8) 大久保明男 2000 アイデンティティ・クライシスを超えて：「中国日裔青年」というアイデンティティをもとめて 蘭信三編「中国帰国者」の生活世界 行路社 pp.325-351
- 9) コガ, エウニセ A.イシカワ 1998 来日日系ブラジル人子弟の教育とアイデンティティ：出稼ぎ現象の中の子どもたち 年報社会学論集 関東社会学会 第11号 pp.71-82
- 10) 関口知子 2003 在日日系ブラジル人の子どもたち：異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成 明石書店
- 11) 森田京子 2004 アイデンティティ・ポリテックスとサバイバル戦略：在日ブラジル人児童のエスノグラフィー 質的心理学研究 3号 pp.6-27
- 12) 佐藤郡衛 2001 国際理解教育—多文化共生社会の学校づくり 明石書店 pp.133-152
- 13) 趙衛国 2006 ニューカマー生徒の学校適応に関する研究—二人の在日中国人高校生の事例を通して— 質的心理学研究 日本質的心理学会 5号 pp.235-254
- 14) 志水宏吉 1998 教育研究におけるエスノグラフィーの可能性—「臨床の知」の生成に向けて 志水宏吉編著 教育のエスノグラフィー—学校現場のいま 嵯峨野書院 pp.1-28
- 15) 渋谷真樹2001 「帰国子女」の位置取りの政治：帰国子女教育学級の差異のエスノグラフィー 勁草書房
- 16) 広田康生・藤原法子 1994 外国人児童・生徒のアイデンティティの行方 奥田道大・広田康生・田嶋淳子編著 外国人居住者と日本の地域社会 明石書店 pp.258-303
- 17) Hammersley, M. and Atkinson, P. 1983 Ethnography: Principles in practice. London: Tavistock p.2
- 18) 岩田純一(編集), 浜田寿美男(編集), 矢野喜夫(編集), 落合正行(編集), 松沢哲郎(編集)1995 発達心理学辞典 ミネルヴァ書房 p.398
- 19) 松井豊 1990 友人関係の機能 菊池章夫・斉藤耕二(編)ハンドブック社会化の心理学 川島書店 pp.283-296
- 20) Tsuneyoshi, R 2001 The Japanese model of schooling: comparisons with the United States, New York: Falmer
- 21) 鎌幹八郎・山下格 1999 アイデンティティ 日本評論社 pp.63-64